

玉川上水の奇跡「ひとくい川」

第七話

4. ひとくい川

玉川上水は、小平から現在の五日市街道に接近し、西武多摩湖線の一橋学園付近で街道の沿って流れ、武蔵境の境浄水場付近で街道から離れる（写真 13）。一方、五日市街道は杉並梅里（新高円寺）で青梅街道に合流し、新宿手前で成子坂で神田川を通過する（第二話写真 2-a）。だが、この坂の最低標高は 25m で、新宿（四谷大木戸）よりも 9 m 低い。これが上水が境浄水場で五日市街道を離れた理由である。

青梅街道も甲州街道、いずれも新宿四谷よりも低い低地があり、新宿には行けないのである。そこで、五日市街道と甲州街道の両低地を有さない部分を利用して新宿に達するという新しい路線（バイパス水路）計画が進められたものと推論する。

武蔵野台地は東南に傾斜しているので、五日市街道は南にある甲州街道よりも上位に位置する。したがって 2 街道の低地部分を避けて、この間に新水路を掘削すれば（バイパス水路を作れば）、水は甲州街道方向に流れることになる。しかし、武蔵野の原生林、谷地や池などがあり、主要道路はなく、工事は極めて難しかったであろう。今まで経験したことのない、綿密な台地測量、そして原野に水路を開くことは、まさに未踏の冒険であったと思われる。

この計画は玉川上水の最後の成功の可能性を残すものであり、失敗すれば、おそらく上水は実現されなかったと思われる極めて厳しい選択である。このバイパス水路は、五日市街道（境浄水場）→井の頭→久我山→高井戸→甲州街道（上北沢）の玉川上水である。これが「ひとくい川」と称されたのであろう。



写真 13 玉川上水は境浄水場で五日市街道から離れ、上北沢甲州街道に至る。五日市街道（境浄水場）から甲州街道上北沢まで約 8.6km。() 数字は地標高 m

このバイパス水路の掘削は五日市街道の境浄水場手前から JR 三鷹、井の頭池の西側（御殿山）を通り、神田川にきわどく接近する狭い台地を流れ、上北沢で甲州街道筋に達する。この間の井の頭・牟礼の曲折した上水路の難所は（写真 13）から読み取れるであろう。武蔵野台地を流れる野川、仙川と神田川、この 3 本の河川を横断せずに、この間の地形を巧みに縫いながらも、唯一、ただ一本のバイパス路線を見だし、成功させた技は、まさに奇跡である。

この「ひとくい川」には溺死した人を弔う碑、三鷹（太宰治）、井の頭公園（松本訓導）、久我山に供養塔（写真 14）が水路沿いに見られる。古老はこのあたりで溺死した話を聞いたことがあると言う。特にこの技術的に開削難関であった三鷹→久我山→高井戸あたりが、まさに「ひとくい川」に相応しい流れであったのであろう。

水難事故の多かった三鷹と久我山（牟礼橋）の 2 点の地上標高差は約 7m あり、その間の距離は約 3.3km である。すると、この間の地上の勾配はほぼ 2.1/1000 となり、玉川上水の平均勾配 2.3/1000 と大差は無い。ここが特に危険な流れであったとすれば、部分的な狭窄での急流、屈曲した水路に生ずる浸食洞（ポケット）が原因であったとも考えられる。このポケットらしきものは現在でも探すことが出来るかも知れない(三鷹牟礼 2017)。



写真 14 - a
三鷹 太宰治



写真 14 - b
井の頭公園 松本訓導



写真 14 - c
久我山水難碑

写真 14 水難の供養碑。このあたりがいわゆる「ひとくい川」なのであろうか。

高井戸から新宿までの緑道

現在は、高井戸の先は暗渠となる。緑道はやや盛り上がった平坦な道であるが、甲州

街道からやや離れた高台を通りつつ、巧みに低地を迂回しながら新宿までの約 9km を結んでいる。新宿近くになると、道は分かりにくい、新宿駅南口付近の南側を通り、さらに鉄道路線を越え、新宿御苑の北側の旧甲州街道に沿って、内藤町に至り、四谷大木戸で終わる。新宿四谷大木戸には玉川上水の碑がある。この周辺が江戸で一番高い台地標高を有している。これはまた、玉川上水がいかに巧妙に作られているかの証でもある。

5. まとめ

玉川上水に見る正確な地形調査、その施工技術は一朝一夕で得られたものではなく、長年、積み上げられた技術と体験に基づくものである。地勢図から分かることは、この三鷹→高井戸間では谷地すれすれの台地限界まで水路を設け、通常では考えられない、大胆な水路配置、屈曲した水路、また浸食防止の玉石積の法面工法などには卓越した技が感じられる。この奇跡ともいえる玉川上水の成功は正確な計画・設計と測量および施工の決断によるものであろう。多摩川の利水の技がこの「ひとくい川」に結集されているのである。

玉川上水の奇跡的な成功は、「川縁通り堤築立て法」の導入と「測量技術の向上」によって実現された「ひとくい川」の完成にあると思う。多摩川の灌漑の水田から台地への技術向上を見ることによって、350 年以上を耐えた玉川上水の素晴らしさの背景が分かる。



写真 15 四谷大木戸門の碑 (新宿区四谷四丁目)